

近畿地方の万葉集と風景画シリーズ（第四十七回）

かものやしろ あおいまつり

「賀茂神社（葵祭）」

ゆ ふ た た み た む け

木綿畳 手向の山を 今日越えて

の べ

いほり

われ

いづれの野邊に 廬りせむ我

作者・大伴坂上郎女 卷六一〇一七

（解説）手向けの山を今日越えていって、何処の野辺にいほりをしようかしら、われらは。

○「木綿畳」は楮こうぞの木の皮を原料とした布のことで、道中の無事を祈って神に手向けるのに使うので、手向けの山の枕詞となっている。

○この歌の題詞は「天平九年（737）夏四月、大伴坂上郎女の、賀茂神社を拝み奉りし時、便すなはち相坂山あうさかやま（逢坂山あるいは合坂山ともいう。）を越え、近江の海を望み見て、晩頭ゆふぐれに還り来て作る歌一首」となっている。

○なお、「手向けの山」は題詞にある相坂山（京都市と大津市との境の山）、「近江の海」は琵琶湖を指す。

また「晩頭」は夕暮れを云う。

○「賀茂神社」とは京都府京都市にある賀茂別雷神社（上賀茂神社）と賀茂御祖神社（通称・下鴨神社）の2つの神社の総称である。

○題詞に参拝となっているが、四月とすることから推せば、毎年陰暦四月の中のその酉とりの日に行われる京都二代祭りの一つ「葵祭」を見学がてらにでかけたようである。また、前日とその晩は山背に宿泊という。三日ばかりと遊覧との説がある。（保育社・万葉の歌「人と風土」参照）

○京都三大祭といえば春5月の「葵祭」、夏7月の「祇園祭」、そして秋10月の「時代祭」です。なかでも現在、毎年5月15日におこなわれる「葵祭」はもともと由緒のある祭礼といわれている。

○葵祭は下鴨神社と上賀茂神社の例祭で正式には「賀茂祭」といわれ、当日の祭りは、約1400年前、平安時代の優雅な王朝装束に葵の葉を飾った行列で知られており、京都御所から下鴨神社を経て上賀茂神社へと向かいます。行列は500人を超え、長さが1キロにも及びます。行列はさながら現代によみがえった平安絵巻。馬36頭、牛4頭、牛車2基、神輿1台による王朝行列が京都の街中、およそ

8キロの道のりを巡行します。

○この途次にある下鴨神社の境内に広がる「糺すの森」はただ縄文時代から生き続ける広さ約12万平方の森林で国際文化都市・京都の中心地に位置している。

(参考文献)・日本古典文学大系 「萬葉集」・糺の森財団「萤火の茶会」・保育社・万葉の歌「人と風土」等

(写生地)

下鴨神社境内に広がる秋景色がすばらしい瀬見せみの小川沿いの糺の森を描く。(池田杏花)

